

抄録

結核専門雑誌

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose 69

Bd. 2 Heft. 1928.

1. 結核豫防接種トシテ毒力アル結核菌ヲ以テスル皮膚接種ニ就テ

A. Moeller.

セルテル氏が小兒ニ就テ行ヒシ毒力アル結核菌ノ皮下注射ハ其ノ靜脈内注射ト同様ニ危険ナリ。之レ皮下ニハ毛細血管、淋巴管多ク菌ノ吸收ヲ容易ナラシメ速ニ全身ニ傳播セシムルニヨル。サテ個體ノ免疫獲得ハ限局性ノ感染アレバ足り且ツ感染ノ大サニ全ク關係ナシ。茲ニ於テ著者ハ皮膚ガ抗原刺激ニ反應スル點ヨリ刺絡セル皮膚ニ毒力アル結核菌ヲ用フル事ヲ稱揚セリ。皮膚ハ毛細血管、淋巴管網ニ乏シク菌ハ長時間緊密ナル結締織内ニ保タレ抗體形成ノ下ニ徐々吸收セラル。又セルテル氏ノ皮下法ハ直接肉眼的ニ經過ヲ觀察シ能ハザルヲ以テ危険大ナルモ著者ノ法及ビウヰキッチマン氏ノ表皮下法ハ直接ニ見得ルヲ以テ危険ヲ極度ニ限少セシメ得。

2. チール・ニールセン及ムッフノ證明法ニ際

シテ現ハル、結核菌ノ態度ニ關スル實驗

Karl Hagedorn.

著者ハ結核菌染色法ニ疑問ヲ懷キ、チール氏法及ビムッフ氏法ニヨリ染色ヲ行ヘリ、其ノ結果ハ大多數例ニ於テ、チ氏法ハ菌ノ發見率高キ點、標本ノ美麗ナル點ニ於テ満足ナル所見ヲ與ヘリ。本法ノム氏法ニ對シテ特ニ卓絶セル點ハ形態ノ鮮明ナル事及ビ誤ラ惹起スル如キ色素沈著ノ殆ンドナキ事ナリ。併シ尙ホ、チ氏法ニテ發見サレズ、ム氏法ニテ發見サル、菌型アリ。ム氏法ニテ發見サレタル菌ハチ氏法ニ染メ換エルコトニヨリ影響サレザルモ、チ氏法ノ後、ム氏法ヲ重タル時ハ著シク影響セラル、即チ、チ氏法陰性ナリシ菌型ハ、ム氏法ヲ重テ更ニチ氏法ニ染メ換エル時ニ、チ氏陽性トナリテ現ハル。

(池上抄)

3. カルル・ハゲドルン氏ノ上記ノ報告ニ對スル批判

H. Lange.

ハゲドルン氏ノ成績ノ結果、ランゲ氏ハ管テ主張シ居リシムッフ型ヲ否定スル立場ハ正シカラザリシ旨訂正セリ。ハ氏ノ認メタル此ノ特殊ノムッフ型ハ比較的稀ナルモノニシテ其ノ毒力ニ關シテハ不明ナリ。又此ノ如キ染色上ノ性質ノ變化ハ感染後ニ於ル該動物ノ生存期間ノ長短ニ關係ス。(岡抄)

4. 結核ノ第一期

Jessen.

著者ハ一九二六年ニ發表セル結核病變ノ三階段觀即チ第一段。炎性病變、第二段。壞死、第三段。壞死竈ノ排除。ニ就テ最近得タル實驗例ヨリ更ニ之ヲ確定的ノモノト考ヘ結核性病變ニハ必ズシモ巨大細胞及ビ結核結節ノ形成ヲ必要トセザル事ヲ主張スルト同時ニ所謂特殊結核性病變ナルモノハ經過ノ

緩慢ナル場合ニ行ハル、モノニシテ即チ第一般ノ炎症病變ヨリ治愈ニ向フ場合其ノ間ニ惹起サル、モノナリトセリ。

(岡抄)

5、海狸ニ於ケル辜丸ノ「ツベルクリン」反應

K. G. Hedemann.

「ツベルクリン」辜丸反應ヲ行フニハ一・五〇ヨリ一・五〇〇位ニ稀釋セルモノ、〇・一ヲ用フ。反應陽性ナル時ハ接種サレタル辜丸ハ著シク腫大硬化ス。必要量接種サレ且ツ試験動物ガ「アレルギー」前驅期又ハ惡液期ニ非ラザル限リ本反應ハ結核性罹患ノ確實ナル時ハ常ニ陽性ニ現ハル。「アレルギー」前驅期ニアルモノニ於テ本法ヲ反復施行スル時及ビ接種量ノ少ナキタメニ反應ヲ起サザリシモノニ必要量ヲ用フル時ハ陽性トナル。嘗テ陽性ナリシモノモ本法ヲ反復スル時ハ或ハ陽性ヲ示シ或ハ陰性ヲ示スニ至ル又、之ヲ交代ニ現スコトアリ。辜丸反應ハ皮膚ノ夫レニ比シ屢々早期ニ現ハル、モ稀ニハ遅ク現ハル、事アリ、又惡液期ニアリテハ或ハ速ニ或ハ遅ク皮膚ノ夫レヨリモ消失ス。菌型決定セル菌株ヲ以テ感染セシメタル海狸ニ於ケル鑑別的ノ「ツベルクリン」接種ハ該菌ニ對シテ特ニ證明ヲ與ヘザリキ。

(池上抄)

6、血管運動神經興奮性及生物學的皮膚反應

Schuberth, Albert.

七四〇例ニ就テ血管運動神經興奮性(皮膚紋晝症)及ビ生物學的皮膚反應(ピルケー氏皮膚反應)ヲ比較研究シタルニ大多數例ニ於テ兩反應ハ並行スルモノナルヲ認メタリ。然ラザリシ場合ハ寧ロ前者ノ興奮性高マリオレリ。唯稀ニ後者ノ高マリ居ル事アリ。

(池上抄)

7、成人ニ於ケル所謂 Epituberkulöse Infiltration

抄 録

ration ニ關スル疑義

Toni Sonnenfeld.

著者ハ Epituberkulöse Infiltration ニ關スル文献ヲ歴史的ニ概説シ自己症例六例ニ就テ其ノ慢性肺炎、滲出性結核トノ鑑別困難ナル點ヲ擧ゲ而モ尙ホ略痰所見。人工氣胸術ノ影響。經過ノ觀察ニヨリ大體ニ於テ鑑別可能ナルヲ述ベリ。本症ハ主トシテ小兒ニ發現スルモノ一五乃至三五歳ノ者ニモ來リ迷走神經不安定症ヲ有スル淋巴性體質ト關係アルモノ、如シ。生物學的ニハ肺結核ノ第二期ニ一致シ其ノ發生ハ内因性ノ再感染ニヨルモノナルカ外因性ノ再感染ニヨルモノナルカ不明ナリ、其ノ何レニシテモ此ノ過敏期ニ於テハ強度ノ炎症反應ニ導クト云フ、ランケ、シュールマンノ意見ニ同意セリ。病理解剖的ニハ組織學的的研究ヲ必要トナス。部位ハ右側鎖骨下ニ多ク潛行性ニ始リ自覺的症候ヲ缺如スル事多シ、打診、聽診上ノ所見ハ必ズシモ病竈ノ廣袤ニ關係ナキモX線所見ハ例外ナク著シキ變化ヲ示ス。即チ銳利ニ區劃セラレタル軟影ニシテ三角形ヲ呈ラ呈シ其ノ頂點ハ肺門ニ向フ。體溫ハ不定ニテ喀痰ハ粘液膿様、結核菌ノ證明ハ不定ナリ。血液像ヲ見ルニ白血球增多比較的淋巴球減少症ヲ呈シ、白血球ノ左方移動著シ。サレド浸潤ノ吸收ト共ニ常態ニ復ス。赤血球ノ沈降速度速カナルモ吸收ト共ニ常態ニ復ス。之ハ豫後決定ニ役立つモノナリ。鑑別診斷上注意スベキモノトシテ滲出性大葉間肋膜炎、眞性肺炎、慢性肺炎、乾酪性肺炎(滲出性浸潤)ヲ擧ゲ治療ニ對シテハ傍觀的態度ヲトルモノ多クノ場合人工氣胸術ハ浸潤ノ吸收ヲ促ス事ヲ述ベ居レリ。豫後ハ疑シキモ或ハ痕跡ナク吸收セラレ、或ハ空洞形成ノ下ニ第三期ニ入ル。

(池上抄)

8、下葉ニ始ル氣道系結核型ニ就テ

Rudolf Pohl.

氣道系ニ進捗スル結核ノ初期ニ於テハ屢々下葉ノ尖端ガ注目スベキモノトナル。之ハ臨牀的検査ニテハ見逃ス事アリX線像ハ肺門ト下葉尖端ガ相重リテ投影サル、タメ特殊ナル像ヲ現ハサズ。タメニ肺門部浸潤ノ如ク思惟サル、事アリ。此ノ如キ場合第一前額位ニ於テ投影セシムル時ハ陰影ハ肺門ヨリ遠ザカリテ誤ルコトナキ像ヲ示ス、一部ノ初期纖維性乾酪性結核ハ自然ニ停止シ纖維様トナリテ治癒ス、サレド下葉尖端ニ空洞ヲ有スルモノハ周圍ノ浸潤ハ消退スルモ空洞ハ長期間其ノ儘殘留ス、治療ヲ施サルモノハ結核性物質ノ傳播ニヨリ漸次増悪シ、下葉尖端ノ原發竈ハ蠆齧ヲ作り終ニ該側肺尖部ニ向ツテ進行ス。豫後ハ險惡ナルモ上葉ヨリ始リシモノ、如ク悉ク惡キモノニ非ズ。

(池上抄)

9、胸腔鏡法及ビ燒灼法。新法ト其ノ目的

Gustav Maurer.

第一回報告ニ於テ其ノ方法ヲ述ベリ。

10、角膜ヲ以テスル弱毒力結核菌特ニB、C、

Gノ植エ繼ギニ就テ

O. Kirchner.

兎又ハ海猿ヲ箱ニ入レテ固定シ、「コカイン」ヲ點眼シ眼球支持器ヲ以テ眼球ヲ固定ス。感染ヲ行フニハ細キ白金管ヲ角膜内ニ刺入シ之ヲ角膜表面ニ平行ニ、五乃至七耗刺入シ、「レンズ」豆大ノ水泡ヲ作ル。本法ニヨリB、C、Gノ1/1000懸ヲ注入スルニ外傷性角膜刺戟ヲ除キテハ著シキ變化ヲ來サズ。水

泡ハ吸收セラレ角膜ハ透明トナル、之ニヨリテB、C、Gヲ其ノ性質ニ變化ヲ來ストナク更ニ角膜ヨリ角膜ニ植繼ギ行クヲ得、又角膜ノ透明ナル事ヨリ次テ起ル變化ハ更ニ植繼グ時期選擇ニ對シ長キ目標トナル。本法ニヨルバ自然感染ニヨリテ他菌株ノ混入スルヲ防止シ得、最後ニ感染量ニヨル角膜ノ形響ニ就テハ後報スルコトアルベシト述ベリ。

(池上抄)

11、肺結核ノ成因ニ就テ

Oskar Pischinger. (Lohr am Main)

肺結核形成ニ當リ其ノ最初期ニ臨牀上注意スベキ病變トシテ所謂從來ノ肺炎「カタル」ト早期浸潤トヲ掲ゲ、其ノ何レガ重要ナルカラ考案セルモノナリ。患者ハ肺炎「カタル」ナルモノガ肺結核ノ原因ヲナストノ説ヲ否定シ去リタルモ、更ニ早期浸潤ヲ以テ此位置ニ置ク可キヤ否ヤニ關シテハ現今最モ信セラシキモノトセラレツ、アレドモ學術的ニハ尙研究ノ餘地アル事ヲ指摘セリ。

(岡抄)

12、肺結核ノ變病ニ關スル新見解ニ對スル補

遺

J. Hollo. (Budapest)

著者ハ八年前(一九二〇)ハンガリー語ニテ著述セル自家ノ新見解ヲ更ニ敷衍セリ。即チアシヨフ等ノ(所謂フライブルク學派)滲出及ビ増殖型分類ヲ臨牀上ニハ全ク應用シ得ザルモノトナシ、全ク臨牀上ヨリ自家ノ經驗ニヨリ、解熱劑ノ效果、其他臨牀的症狀及ビ經過ニヨリテ肺結核ヲ、本來ノ肺結核(Lungenphise)ト Juvenile Tuberkulose トニニ大別シ、之ニ關スル診斷、豫後、治療等ヲ略述セリ。

(岡抄)

13、肺結核ノレントゲン學的質的診斷ハ如何

ナル前提ノ下ニ實際的ニ可能ナルカ

F. M. Groedel u. R. Wachter. (Bad Nauheim)

本問題ニ關シテ最も重要ナルモノハレントゲン學的的要約、特ニ其手技ナリ。著者ハ此點ニ注意シ、近竝ニ遠距離攝影ヲ行ヒテ其ノ效果ヲ比較セリ。二米以上ノ焦點乾板距離ヲ以テ遠距離攝影トナシ、最も遠キモノハ四米ニ達セリ。特ニ近年肺結核ノ外科的療法ノ發達ニ從ヒ、肺病變像ヲ可能的鮮銳ニ撮影スルニキ事ハレントゲン専門家ノ注意スルべき事項ナリ。(岡抄)

14、若年期結核(Die juvenile Tuberkulose)ノ

病理解剖學(破瓜期結核問題[Pubertätsproblem])

W. H. Steflo. (Moskau)

ランケ及ビホロ等ノ提唱セル若年期結核ニ就テ、特ニアスマン、レテケル兩氏ノ病竈ニ關シテ著者ハ其ノ病理解剖學的研究ヲ行ヒ、著者ノ得タル一六乃至二二歳ノ十九例ニ就テ檢索セリ。上記病竈ノ因ニ關シテハ未ダ決定的ノ決論ニ達セザルモ概子轉移(內的再感染)ニヨリテ行ハレ、所謂細葉性結節性竈ニハ滲出性及ビ増殖性ノ二様アリ、何レモ血管性轉移ニヨリテ起リ得可シ。而シテ若年期結核ハ人體ト菌トノ共生的關係ノ障礙ニヨリテ生ズルモノニシテ、淋巴腺ニ變化ナキ所ヨリ考フルニランケノ第二期ニ屬スルモノニ非ズシテ第二及ビ第三期ノ移行期ニ來ルモノナリトセリ。(岡抄)

15、ゼルテル氏結核豫防注射ノ批判

Wm. Böhm. (Dresden)

抄 録

本論文ハゼルテルニ對スル結核豫防注射法特ニ其ノ方法ニ關スル所謂本家争ヒノ意味ニヨツテ書カレ、本文ニ次テ直チニゼルテル氏ノ辯駁アリ、更ニ之ニ對シテ兩者ノ應答アリ。而シテ最後ニ本誌ノ編輯者ブラウエル氏ハ次ノ如キ意味ノ言明ヲナシテ本問題ヲ誌上ニ打切りトナセリ。即チ兩者ノ争ヒガ學術的ニ意義アル限り本誌ニ之レヲ掲載スベシト雖モ、本問題ヲ學術的ニ解決セントセシ編輯者ノ努力ハ水泡ニ歸シタルヲ以テ、此範圍ヲ超エ、特ニ特許ニ關スル問題ニ互リテハ本誌ノ範圍外ナルガ故ニ今後ハ掲載セザル可シ。(岡抄)

Zeitschrift für Tuberkulose. Band 51.

Hef. 2. 1928

16、肺結核ノ急性鎖骨下浸潤ノ問題

A. Brecke.

近來結核ノ最初ノ發現又ハ進行性結核ノ普通ノ發現病竈トシテ早期浸潤ガ論議セラル、ニ至レリ、又實際ニ於テモ結核病ノ症狀ヲ現ハサル以前ニ鎖骨下ニ於テ此浸潤ガ屢々發見セラル、コトハ事實ナリ。

著者ハ多數ノ學者ノ鎖骨下浸潤ニ對スル說ヲ記シ次テ七例ノ自己ノ例ヲ説明シ次ノ如ク結論セリ。

急性ノ鎖骨下浸潤ノ古キ肺炎病竈ヨリ發生スルモノ數例ヲ示シ病理解剖學的ニ説明セリ。

鎖骨下浸潤ハ乾酪性肺炎ノ病竈ニシテ其周圍ニ病竈周圍炎ヲ生ズ、然シ病竈ノ周圍ノレントゲン陰影ガ此病竈周圍炎ノミナルヤ否ヤハ疑問ナリ。

(小林抄)

17、第三期結核ノ發生ニ就テ

F. Hochstetter.

著者ハ二十三例ノ停止性、潜伏性又ハ潜伏性傾向ヲ有スルモノノ硬化性肺尖結核患者、及び三十二例ノ夫レ等ヨリ進行セル肺結核患者ニ就キテ觀察シ、肺結核ノ進行ハ肺尖結核ヨリ進ムコトハ稀ニシテ通常急性ニ發病スルモノナル事ヲ病歴ニヨリテ示シタリ。

(小林抄)

18、脊椎結核ノ脊椎硬直手術 (Wirbelvertebrärende Operation.)

M. Kirschner.

著者ハアルペー氏法ニテ脊椎「カリエス」患者ノ手術ヲ行ヒタリ、アルペー氏法ハ患部ノ脊椎棘及び其上下ノ健康ナル脊椎棘ヲ切り取りテ此所ニ木片ヲ入レテ固定スルナリ、近來ハ此變法ナルボリヤー氏法ヲモ行ヒタリ、而シテ著者ハ十年來是等ノ方法ヲ脊椎「カリエス」ニ施シテ其結果ヲ行ヒタリ特ニ此手術ハ長期ノ臨牀ヲ要シ、又ハ轉地療養等ヲ要スル從來ノ保守的療法ニ比シテ貧困者ニ對シテ最モ意義ヲ有スルモノナリ。

(小林抄)

19、肺結核ノ妊娠中絶ニ就テノ考察

A. Mayer.

妊婦ノ肺結核ヲ初期ニ發見診斷スルコトハ困難ナルコトニテ單ニX線單ニ臨牀的ニノミニテ定ム可キモノニアラズ特ニ妊娠中絶ヲ行フヤ否ヤニ附キテハ慎重ナル態度ヲ以テ定ム可キナリ、又妊娠中絶ヲ行ハザル場合ノ豫後ヲ定ムルコトハ甚ダ困難ナルコトナレドモ一般ニ進行性ナラザル症狀ノ少ナキ結核ニ於テハ妊娠及産褥ガ惡影響ヲ及ボスコト比較的少ナシ、肺結核ナルガ故ニ

ミダリニ妊娠中絶ヲ行フハイマシム可キコトナリ。

(小林抄)

20、女子生殖器結核ト不妊症

E. Vogt.

不妊症ノ婦人ニハ生殖器結核ヲ有スルモノ少ナカラズ是等ノ婦人ハ強キ症狀ヲ有セズシテ妊娠ヲ希望シテ醫師ノ診察ヲ受クルモノ多シ、是等ノ患者ノ子宮粘膜炎ヲ取りテ檢スルトキハ子宮結核ヲ見ルコト屢々ナリ。

著者等ハ二百十二例ノ不妊ノ婦人中七・二%ノ子宮結核ヲ有スルモノヲ發見セリ。

又此外子宮附屬器ノ結核性腫瘍ノ爲メニ不妊トナルモノモ存ス。(小林抄)

21、妊娠ト結核

Eugen Schrag.

妊娠中絶ヲ行フ可キヤ否ヤノ疑問ノ爲メニ著者ノ診斷ヲ乞ヘル百四十八例中九十五例ハ肺結核患者ニテ此中七十八例ハ三ヶ月乃至一年六ヶ月診療ヲ續ケテ受ケタル故此者ニツキテ觀察セリ。

進行性又ハ以前進行性ナリシ肺結核患者ニ對シテハ妊娠、分娩、産褥等ハ不良ノ影響ヲ與フ。肺炎結核ニ對シテハ惡影響ヲ與ヘズ、結核ノ型ニヨリテ、以前良好ナル經過ヲ取り來レル肺結核ニハ妊娠ノ影響ヲ受クルコト少ナシ。進行性ノ性質ヲ有スル肺結核ニ於テハ妊娠中絶ヲ必要トナス、急性ノ進行セル結核ニ就テ、特ニ妊娠ノ後期ニ於テハ妊娠中絶ヲナスモ無効ナリ。妊娠中絶ヲ行ハザル妊娠セル肺結核患者ハ婦人治療所ニ入院セシメテ治療シツ、分娩セシムルヲ最モ良シトス。

(小林抄)

22、結核性虹彩毛様炎ノレントゲン療法ニ

就テ

Wolfgang Stock.

著者ハ七年來百七十例ノ虹彩毛様癩ノ患者ニX光線ヲ局所ニ放射セリ。著者等ハ最初皮膚單位量ノ五〇%ヲ放射センガ強過ギシ故HEDノ一〇%迄下ゲタリ、此量ニテハ反應ナク眞影響ヲ得シガ一年後ニHED二〇%トナシ夫レ以來此量ヲ使用ス、X線放射後一、二日後ニ局所反應ヲ起シ充血シ光線ニ對シテ過敏トナリ疼痛アリ二乃至四日後ニハ此反應消失ス、四週後ニ第二回ノ反應起ルコトアルモ之レハ輕シ。

光線放射後十四日乃至四週後ニハ灰白色ノ點ガ消失シ次第ニ治癒ニ向ヒ良好ナル例多シ、又若キ患者ハ四十歳以上ノモノヨリ一般ニ良好ナリ。(小林抄)

23、皮膚結核ト結核免疫

Paul Linsler.

著者ハ皮膚結核ト其免疫トニ附キテ論シ皮膚ニ於テハ結核ニ對スル防禦力ハ細胞ニ止マルモノニシテ血液及ビ血清中ニ出ズルモノニアラズトナセリ。

(小林抄)

24、凍瘡狀狼瘡ト結核性囊狀多發性骨炎ト共

ニ起レル特殊ノ肺疾患ニ就テ

P. Hecht.

著者ハ四十一歳ノ凍瘡狀狼瘡ト結核性囊狀多發性骨炎トヲ有スル患者ノ肺ノ變化ヲ主トシテレントゲン線ニヨリテ觀察シ其肺ノ變化ハ皮膚及ビ骨ニ於ケル疾病ト一致セル特殊ノ結核性ノ組織反應ニヨルモノナラントナセリ。

(小林抄)

25、尋常性狼瘡ニ對スル季候ト天候トノ意義

Fritz Veal.

多クノ狼瘡ハ夏季ニ於テ輕快シ冬季ニ於テ増悪ス特ニ早春ハ患者ニ對シテ最モ惡シキ時期ニシテ結核菌ノ生活ニ對シテハ最モ良好ナル時期ナリ、冬ノ始メニ於テハ日光が多ク、寒キ故ニ未ダ身體ガ抗ヘ得ラル、モ濕氣ヲ有スル寒サノ冬ノ終ニ於テハ身體ノ状態ハ惡シクナリ、結核菌ニ取りテハ良好ナル状態トナル。

夏ノ效果ニ就キテハ快晴ノ日ノ最モ多キ時ガ最モ良好ニシテ五月ヨリ七月迄ノミナラズ初秋ハ九月頃ニ於テモ亦甚ダ良好ナル結果ヲ見ル、是等ノ關係ハ恐ラク身體ノ状態ト結核菌ノ生活状態ト發育トニ關シテ起ルモノナラン。

(小林抄)

26、肺結核ト人工太陽燈及日光

H. F. Schoepfer.

著者ハ肺結核ニ對シテ人工太陽燈及ビ日光療法ヲ行フニ當リテ其適應症ト方注トヲ誤ルトキハ甚ダ危險ニシテ不良ノ結果ニ落チ入ルコトヲ例ヲ擧ゲテ説ケリ。

(小林抄)

27、汗ノ皮内注射ト結核

E. Dorn.

活動性結核患者ノ汗ノ内ニハ尿中ニ於ケルモノト類似セル「アンチゲン」様ノ性質ヲ有スル物質ヲ有ス。
結核患者ノ汗ヲ結核患者ノ皮膚内ニ注射スル時ニ起ル反應ハ結核ニ對シテ特殊ノモノナリ、此反應ニハ全身反應及ビ病竈反應ヲ伴ハズ。

輕キ結核患者ヨリ得タル汗ヲ輕キ結核患者ノ皮内ニ注射シ反應陰性ナル場合モ重キ活動性ノ患者ノ汗ヲ此患者ニ注射スル時ハ陽性ヲ示スコトアリ。

28. Schröder Th. Tb. V. 及胸腺「エキス」ノ

(小林抄)

治療試験

G. Sicherling.

Th. Tb. V. 及ビ胸腺「エキス」ハ肺結核ニ對シテ特殊ノ抗結核的作用ト非特異性ノ刺戟作用トノ兩方面ヨリノ作用ヲ有スルモノナリ。著者ハ二十一例ノ比較的重症ノ確實ニ活動性ニシテ多クハ兩側ニ病竈ヲ有スル肺結核ニ五乃至八ヶ月ニ互リテシュレーデルノ Th. Tb. V. 及ビ胸腺「エキス」ヲ使用セリ、而シテ本劑使用前後ニ於ケル、ビルケー氏反應、赤洗反應、「リンホチーテン」數、體溫、菌等ヲ比較セリ。

其結果トシテハ Th. Tb. V. 及ビ胸腺「エキス」ヲ組合セテ使用スルトキハ特殊療法トシテ又非特異性ノ刺戟療法トシテ作用ス故ニ一方ニハ癥痕形成ノ傾向ヲ有シ治療ニ向ヒ良キ影響ヲ與フルモ亦一方ニハ強キ炎症性ノ反應ヲ起スコトアリ、使用量ト適應症トハ注意シテ定ム可キナリ。

(小林抄)

29. 結核豫防ニ關スルウールテンベルグ國ノ

發表

ウールテンベルグノ結核豫防協會ニ於ケル結核相談所ノ發展ト財政的援助、小兒ノ保護、退院患者ノ職業ニ對スル設備、國民ノ理解等ノ諸種ノ問題、及ビ豫防協會ノ事業、相談所ニ於テノ一般的ノ注意等ニ就テ記セリ。(小林抄)

The American Review of Tuberculosis.

Vol. 17, No. 6, 1928

30. 經肋膜性結核感染ニ依ル滲出性及ビ増殖

性變化ニ關スル一考察

Max Pinner.

生菌又ハ加熱菌ニテ前處置セル家兎ノ肋膜腔ニ種々ナル量ノ生菌ヲ注射ヲ行ヒ、一定時日後ニ、肋膜腔ノ滲出液量ト剖檢の所見ヲ觀察シ以テ滲出性反應ヲ健康家兎ニ於ルモノト比較シテ、滲出性變化ノ著明ニシテ、又増殖性變化モ常ニ隨伴スルモノナリトイヘリ。

(關根抄)

31. 幼兒ニ於ル肺結核感染

Jerome L. Kohn.

本報告ハ生後十二週ヨリ五歲迄觀察セルモノナリ。即チ二週間前ヨリ起リタル高度ノ呼吸困難ヲ主訴トシタル、生後十二週ノ幼兒ナリ。X線所見ハ右肺上葉ノ無氣肺、及ビ下葉ノ氣腫、右橫隔膜壓迫及ビ心臟ノ左方轉位ノ像ヲ示ス、是等所見ヨリ、氣管枝異物又ハ胸腺肥大ニヨル壓迫症狀ト思ハレルニ、ビルケー氏反應陽性ニシテ、爾後、五箇年間連續的ニX線ニヨリテ觀察セルニ、二十一週目ニハ前記症狀ハ消失シテ年齢三年二ヶ月ニ至リ、右肺上葉下部ニ豌豆大ノ石灰化セル初期感染像ヲ證明セラレ、更ニ五歲ニハ著明トナレリ。

(關根抄)

32. 胸腔内結核性淋巴腫

H. Wessler.

一般ノ肺門部結核性淋巴腺腫ノ臨牀的方面ハ別トシテ、著者ハ成人ニ於ケル

氣管、氣管枝淋巴腺ノ著明ナル肥大ヲ示セルX線寫眞ヲ掲ゲ、最近、病理學者間ニ問題視セラル、假性白血病、ホドキン氏病等ノ淋巴腺腫トノ關係及ビ同一說等ヲ説ケリ。

33、前縦隔淋巴腺結核(剖検例)

Richard C. Buckley.

患者ハ六十五歳ノ病院老小使、胸内苦悶、左胸部疼痛、咳嗽咯血等ノ症狀ヲ以テ始マリ。左上葉肺結核、氣管枝炎及ビ肺氣腫、X線診斷上、縦隔竇暗影ノ擴大等ノ診斷ノモトニ加療中、約二ケ年ノ經過後ニ死亡セリ。死體解剖的所見ハ前縦隔竇淋巴腺ノ結核性肥大ニシテ大動脈及ビ氣管ヲ壓迫セルモノナリ。因ニ患者ハ屢々心臓性喘息様發作ヲ起シタリトイフ。

(關根抄)

34、結核ノ組織反應

R. S. Cunningham.

國際結核病調査會ニ於ケル研究業績ヲ廣汎ニ互ツテ論述セルモノニシテ、著者外數氏ノ實驗ヨリ、結核結節ニ於ケル類上皮細胞及ビ淋巴細胞ノ本態並ニ大單核細胞ハ結締織母細胞トノ關係ヲ述べ、終リニ結核菌喰細胞現象ヲ論ジテ組織免疫ニ及ベリ。

(關根抄)

35、最近ニ於ル結核病理概説

Max Pinner.

著者ハ第一項ニ於テ、術語ニ關スル意見ヲ述ベタリ。即チ佛、獨、米各學派ニヨツテ其ノ學術用語ハ異ルヲ以テ其ノ本來ノ意味ヲ充分明瞭ニ理解サルベキガ重要ナリトシテ、各學者ノ術語ヲ圖表ヲ以テ比較又ハ分類對照シテ説明ヲ加ヘ、第二項初期感染部、第三項ニ再感染問題、第四項ニ粟粒結核等ニ關

シ、近世ニ於ケル滲出増殖性論、及ビ「アレルギー」免疫論ニ就キ諸家ノ事績ヲ紹介シ以テ其ノ意見ヲ加ヘテ論述セリ。

(關根抄)

36、一九二六年度ニューヨーク州民及ビ居留

民ニ於ル結核死亡率

J. v. De Porte.

圖表及ビ地圖ニヨリテ、死亡數ヲ地方別ニヨリ統計的ニ種々ナル方面ヨリ觀察シテ發表セル廣大ナル論文ナリ。氏ハ結論ノ中ニ田舎ニ於ケル結核死亡率ヨリ都會ニ於ケル方がヨリ大ナル數ヲ示スハ特記スベキ一事項ナレ共然シ此レハ該年度ニ獨特ナル事實ナラザルベシト附記セリ。

(關根抄)

結核専門外雜誌

37、結核ニ於ケル尿中「アミノ」酸排泄ニ就テ

Hauschmann, Leo, und Magdalene Streube.

(Klin. Wochenschr. Jg. 7, Nr. 22, 1928)

結核患者ニ於ケル尿中「アミノ」酸窒素排泄ニ關スル研究ナリ、同患者ノ一日排泄量ハフオーリン氏比色法ニヨリテ測定スルニ八七乃至一八四延ニシテ健康者ニ於テハ Raher 及ビ Reanier ニハレバ七五乃至一四八延ナリ。著者ハ「アミノ」酸排泄量ハ攝取セル窒素ノ量ト殆ンド無關係ナル事ヲ證明セリ、「アミノ」酸窒素排泄ノ曲線ハ晝食後一時間半ニ於テ一ノ突起ヲツクルモ此レハ吸收セラレタル蛋白質ニ基因スルモノニ非ズ。

「プリン」缺乏食ヲ與ヘタル場合ニハ「アミノ」酸窒素ト尿酸窒素トノ間ニハ著明ナル並行ヲ示ス事ヲ確定セリ。

(春木抄)

38、一九二二年乃至一九二七年ニ於ケルバル

メルワイド治療所ニ於ケル喉頭結核ノ症

例

Jost, Walther. (Zentralbl. f. die gesamte Tuberkuloseforsch. 29, Bd. II, 11, 12 1928)

著者ノ十五年間ノ喉頭結核ノ症例ニ就テ觀察センモノナリ、凡テノ肺結核症ノ一六・七%ハ喉頭結核ヲ合併セリ、而シテ興味アルハ此合併症ノ大部分ガ紹介セル醫師ニ看過セラレシ事ナリトス。喉頭ノ感染ハ此處ヲ通過スル喀痰ニコル事最モ多ク随ツテ喉頭結核ハ殆ンド常ニ第二次的ノモノニシテ原發性喉頭結核ハ通則トシテ否定ス可キモノトセリ、著者ハ金「メントール」油ノ喉頭内注入ヲ賞讃シ、且ツ今日ノ治療法ニヨリテ喉頭結核ヲ治療ニ導キ得ルモノナル事ヲ確定セリ、即チ凡テノ症例ノ持續的治癒率ハ七・八%ナルモ電氣燒灼法ヲ以テ治療セル場合ノ治癒率ハ二三%ナリ。(春木抄)

會報並ニ雜報

○昭和三年十二月中入會者

- 柳下彦雄 福井市柳下病院長
- 目黒書店 新潟市萬代橋大通リ
- 深津常太郎 愛知縣碧海郡明治村大字東端
- 山浦康 長野縣小縣郡川邊村
- 市村丑雄 岡山市一番町四一
- 植田壽松 朝鮮全羅南道潭陽郡潭陽面
- 戸次正巳 福岡縣八女郡白木村
- 山本勉彌 山口縣萩町江向

○昭和三年十二月中退會者

- 淺田廣輔 大塚省一 稻村純一
- 大石不倦 鶴崎範治 荒木廣業
- 本間毅 宮田松太郎 東元秀影
- 内田義秀 本多忠夫 見鹽武海
- 今村襲助 鈴木堺三 河村九十九
- 齋藤格 東大眞鍋内科 今福正喜
- 山田弘倫 宮川米喜